TAT（主題統覚検査）についての一考察

粟　村　昭　子*

A study of TAT（Thematic Apperception Test）

Akiko Awamura

要旨：投映法のアセスメントの代表として、ロールシャッハ・テストや TAT があげられてきた。しかし、ロールシャッハ・テストに比べて TAT は、使用頻度がかなり少ない。しかし、その有用性は明らかで人間理解のためには欠かせないアセスメントである。本研究では日本における TAT の主要な分析方法を比較検討し考察を加えた。

Abstruct : The Rorschach technique and TAT have been used as a well known of the assessment of the projective techniques. However, compared with the Rorschach technique, the TAT has not been in used in Japan. However, it is obviously that the TAT is useful and indispensable for understanding personality. In this research, comparison of the main analysis methods was carried out in Japan, and consideration was added.

Key words： the TAT　ロールシャッハ・テスト the Rorschach technique　投映法 projective technique

Ⅰ　はじめに

臨床場面で使われる投映法を代表する心理検査としてロールシャッハ・テストと TAT があげられる。両者とも図版を用いて見えたものを自由に被検者に語らせる、という点ではあまり違わないが、前者が頻繁に臨床において使用されるのに比べ後者は有名であるわりに実際使われることは少ない。このことは TAT が創られた米国でも同様であるといわれたり、ロールシャッハ・テストとほぼ同じくらいの頻度で使われているという報告（Watkins et al, 1995）もあったりするが、少なくとも日本においては一般的にあまり使われていないといっても過言ではない。

なぜ敬遠されるのかという理由については諸家が様々な理由を述べているが、おおまかにあげると以下のとおりである。まず、反応を記録するための労力が半端ではない。ロールシャッハ・テストでも自由反応段階を中心に逐語録および観察記録がとられるが、TAT の場合はその量が膨大になるために多くの研究者が被検者に断った上でテープ・レコーダーによる録音を併用している。また、マレーが考案した図版は 31 枚あるが、どの図版を選ぶかや、施行枚数なども研究者によって異なり、統一されていない。さらに、Murstein（1963）が指摘するように TAT の分析法は解釈者の数だけあるといえ、とても分析や解釈の仕方が確立されているとはいえない。従って、ロールシャッハ・テス

*関西福祉科学大学社会福祉学部　助教授

トのように確立された体系がないといえる。その理由としては、反応の記号化や数量化が困難であることがあげられる。現代のようなコンピューター化の時代ではこのことはかなり深刻で、心理学においても計量化が重視されより客観的であることが求められるなかで、TAT の諸特性が時代の流れに合致しにくかったと考えられる。確立された分析法がないこととも関係するが、TAT から何がわかるのかといった基本的なテストの性格も未だ明瞭とはいえない。TAT 作成者の Murray は、当初 TAT 物語が夢や空想と同じで、人間の心の中にある無意識の欲求や衝動がそのまま現れるレントゲン写真のように考えていた。しかし、その後 TAT 物語はもっと現実的適応的でかつ創造的な反応である、という見解が主流になってきており、統一した見解には至っていない。このように、研究者のよってたつ理論が異なるために、一貫した手続きや解釈がとられていないともいえる。以上問題点を概観したが、このほかにもまだ様々な理由が考えられよう。

ところで、TAT は周知のように 1935 年に「空想研究の一方法（A method of investigating fantasies. Archives of Neurology and Psychiatry）」という論文によりハーバード大学の Morgan と Murray によって初めて報告された（Morgan & Murray, 1935）。Murray 以前にも絵画と空想による人格研究はいくつかある。まず安香（1975）によれば、1907 年に Bittain, H. L. という学者が 13 歳から 20 歳までの男女のグループがつくる物語を比較分析し、心理的背景を推論した。ここでは明らかな男女差が認められた。実際の臨床場面でこのような方法が初めて用いられたのはシカゴの少年審判所の嘱託精神医であった Schwartz, L. A. によってであるといわれている。彼は、非行少年に対する通常の精神医学的面接だけからでは得られない、多くの情報を引き出すことに成功したようである。しかし、このテストは Murray たちが再び取り上げるまで心理学者たちに広く使用されることはなかった。Murray を中心とする人格研究の広い視野の中に、この研究方法が位置づけられることにより、世界的に普及し発展した。TAT 研究論文は、各国のものをあわせると現在相当数に上ると考えられるが、ロールシャッハ・テストのそれには遙か及ばないのが現状である。

Ⅱ　わが国の TAT 研究

わが国の TAT 研究は戦後に始まるが、今日まで一度も変更されることなく国際的に使用されている TAT 図版（Harvard 版）以外に日本版の TAT 図版が幾種類か作られた経緯がある。しかし、現在はほとんど Murray の作った Harvard 版の TAT が使用されている。ここでは Harvard 版図版を用いた TAT の、1980 年代以降の主要な分析法、解釈法について詳述したい。

1. 坪内の TAT 分析・解釈

まず、坪内は 1984 年に『TAT アナリシス』という本を公刊した。その中で Schneidman の「ロールシャッハ・テストで把えられたものは、ちょうど人格の骨組みのようなものである。TAT は、人格の肉付きを知ることができる。つまり、TAT は、死人のような青ざめた骨組みに生の息吹を吹き込むことができるのである」ということばを繰り返し引用しながら、ロールシャッハ・テストと TAT を比較し、TAT の分析法や解釈法を考案しているのが特徴である。そしてロールシャッハ・テストのサインアプローチに代替できる TAT 分析法を模索し形式分析試案を作成した。すなわち、各図版はどのような細部で構成されていて、誰もが物語に取り入れる絵の部分はどこか、標準反応（ロールシャッハ・テストの平凡反応）はどのようなものか、病的反応としてどのような反応が賦活されやすくそれらと病態像との対応はどうか、などといった視点から、図版の知覚的把握を評価する方式を呈示している。そこでは各図版にロールシャッハ・テストのような反応の

領域（主要部分：D、小部分：d、特異部分：Dd）を設定し、それらが物語にどのように認知されているかあるいは省略されているか（認知の型）をスコアリングしてその認知パターンを分析する。さらにどのような物語を構成したかという構成面のスコアリングをおこなう。

このような形式分析とともに、もう一方の重要な柱である内容分析では、安香と坪内（1968 a, 1968 b）が用いてきた内容分析のカテゴリーをもとに Tomkins（1947）の level や vector 分析を参照にしつつ独自の分析を展開している。なお、施行時には TAT 図版の順序を考慮するべきとはしているが、施行枚数にはあまりこだわらず、男性系、女性系といった性差のあるカードについても被検者の性よりもその臨床的刺激をもとに適切なものを選ぶべきであるとしている。

坪内は TAT の図版をロールシャッハ・テストと比較しながら、前者は後者のようなインク・ブロットという偶然性をもつ共通性のある図版ではなく、より複雑で多義的な心理的ニュアンスに富んだものであるから、各図版の刺激特性に対応した反応解釈をするべきであるとしている。そのうえで、先にあげた反応領域を含めた各図版の解釈上の重要ポイントや標準反応、特異反応などを海外の文献を駆使して詳述した。Murray の TAT 図版の臨床的刺激特性を整理したことは国内では初めてのことで、彼女以降の分析者にも大きな影響を与えている。ロールシャッハ・テストとの対比的発想は発達の領域にもおし広げられ、ロールシャッハ・テストではある種の児童型反応が知能、人格障害をもつ成人のそれにもあらわれてくることにヒントをえて、TAT でのあらわれ方を研究するなど幅広く標準反応を求めている。さらに、女性のパーソナリティ研究のためには母子関係など女性の特性をはかるカードをもっと作るべきではないかといった女性ならではの提言をしている。最後に坪内は、Murray の研究目的は広大で独自な人格理論を構築することであり、その一手段として TAT つくっただけであるから、これを有効に使いこなすためには柔軟に解釈技法を工夫すべきだとして、Murray の分析技法を固持しなくてもよいのではないかという立場をとっている。

2. 安香・藤田の TAT 分析・解釈

安香と藤田（1997）は、初心者は TAT 物語を分析するときに、まず第一に何を見るべきか、次に何を見ればよいかという手順がわからないのが大きな支障となっているとしている。そのために精神障害の兆候があるにもかかわらず、それを見落として他の分析からはじめてしまったり、被検者の性格の中で中核をなすものは何か、個々の物語の特等が被検者の人格構造の中でどう関連しているかなどがわからなくなるとしている。このことは、今までの TAT 研究者たちが TAT の分析枠をいろいろ提示しているものの、分析した要素をどのように相互に結びつけたらよいかがあいまいであったり、分析手順について書かれているものが少なかったりしたからだとして、コンパクトな解説書を書いている。

安香は、上記の坪内の TAT の指導者であり、共同研究もしていたことから、両者の分析・解釈内容的にはかなり類似点がある。まず、坪内と同様、各図版刺激に対しては標準的な絵刺激認知や状況設定、物語内容があるとしてそれを十分把握し、そこからの逸脱に注目し分析することで、被検者の個性的側面を理解することを勧めている。提示された絵の情景は現在場面であるが、それを中心として過去、現在、未来という時間的流れに沿う物語の筋を通して、被検者の現実生活での生き方をとらえる。そして、絵刺激を被験者の現実生活における具体的諸条件ないしは状況のある種の反映と見ることができるとする立場から、被検者が絵刺激を物語り構成においてどう処理するかということを分析する際のひとつの重要な視点としなければならないとしている。また安香も坪内と共同研

究をしたロールシャッハ・テストに準じた図版の知覚的把握の評価方式を呈示し、D 反応、dr 反応などを用いた分析方法をとっている。なお、TAT の実施に当たっては、カードの選択は実施者の自由であり、枚数も自由であるとし、また順番は番号順にするのが良いとしている。

3. 山本の TAT 分析・解釈

山本（1992）は、「臨床場面で一個の人間を前にして、その人間に関係している事象そのものに、われわれ見る立場にいる者は目を向けなくてはならない。そこに与えられたものそのものに直截に目を向けることこそ、臨床の本質である」として、まず現象学的接近法をとる必要性を説く。そのうえで、把握しようとする対象物に臨床家自身が自己の体験を通して近づこうとすると同時に、臨床家自身がゆがみのない先入観のない対象物についての体験化と自己内の体験把握が要求されているとする。

また、クライエントを理解するには基本的に二つの視点があるとしている。まず、クライエントを対象物として、その病態や人格の力動的構造などを把握する視点と、クライエント自身の独自の現象学的内界を共感することによりクライエント自身がどのように自己を受け止め、自分の置かれた状況をどのように引き受けているかを理解しようとする視点をあげている。そして、前者を診断的理解、後者を治療的理解とした上で、この後者の中核をなすものが「かかわり」方であるとし、治療的理解から出発する治療は人間の限定ではなくより可能性のある開かれた人間像の確立を志向している、として治療的理解の重要性を説く。「かかわり」という語については、「心の現象を理解することは、まさに、一人一人の意識世界において、『それぞれの仕方で対象を含有する』その仕方を理解することである。……（中略）……つまり、一個の人間の自己の内的体験世界への取り組み方を把握するところに心の現象理解に中核がある。この一個の人間の自己の内的体験世界への取り組み方をさして『かかわり』とよぶことにする。」と説明している。そしてこの抜き差しならない状況のかかわりの中にその人の生き方の構造パターンが現れるとする。山本（1992）の TAT 分析はこのように治療者側と治療される側の接近法からかかわり合いまでの枠組みを明確に示しているところに、ひとつの特徴があるといえよう。

ロールシャッハ・テストが、10 枚の図版をその順番から向きまで厳密な扱いを求めていたのに対し、TAT の実施方法については、従来、多くの TAT 専門家は順番にも枚数にもあまりこだわっていなかった。それに対して、山本（1992）の「かかわり分析」では 20 枚とかなり多めの図版を用い、一定の順序で提示する重要性、すなわち時系列で扱う必要性を主張している。ただし、その 20 枚は坪内と同様に男性系列、女性系列など被検者の性を特定しているカードに対しては必要なカードを選択してよいとしている。そして解釈としては、坪内（1997）や安香（1990）の TAT の形式的側面の重要性の強調に理解を示しながらも、そのようなロールシャッハ的な分析手法を批判し、Bellak（1954）の「TAT の持ち味は内容分析である」という主張を用いて、独自の解釈法を提唱している。つまり、ロールシャッハ・テストのように図版の知覚過程に重きを置くのではなく、図版に触発された物語の構造に重点を置く必要性を説いている。さらに、統計的にみて標準反応（いわゆる平凡反応）か特異反応かに分けて考えるのではなく、一つ一つの意味を大切にする立場を主張し、標準反応研究が不可能なくらいに一人一人の独特な物語世界を引き出すべきだとしている。そのうえで、分析解釈態度として次にあげる独自の観点を述べている。すなわち、①TAT 物語に語らせること、②TAT 物語に共感的にとびこむこと、③「あいまいさ」を大切にすること、④全体から部分へそして全体像へ、という解釈態度を勧めている。す

なわち、まず TAT 物語そのものの世界に飛び込んでその人の基本的かかわり合いを解釈者自身の感受性で感じ取ったうえでその世界を十分に共感し、感じられたものをもとにそこに語られている基本的かかわり像の構造を抽出する。この一つの創造の過程が「TAT かかわり分析」のいう解釈であるという。さらに「あいまいさ」、つまり語られる物語の雰囲気や多義性・多様性のもつ意味合いをじっくりと味わう必要があるとする。従来の分析された部品を眺めることから解釈をする手続きを批判し、全体像や全体的雰囲気といった、その人独自の世界を感じた後で解釈のポイントに沿って部分部分を点検し、もう一度全体構造を了解する過程を解説している。そのうえで、解釈のしすぎ（over interpretation）や過度の単純化（over simplification）を強く戒めている。以上のように、こまごまとした分類や記号化を用いず、その人の世界を全体的に把握しようとする独特の分析解釈態度を主張しているのが特徴といえよう。最後に、大変興味深いことは、先に述べた坪内も山本も、被検者が最後のカードで非常に心理的に負担のかかる物語で終わったときには、それを軽減するためのいわば「口直し」のカードを特に設定して終了していることである。

4. 鈴木の TAT 分析・解釈

鈴木（1997）は、TAT の分析・解釈をロールシャッハ・テストのそれと同様に考えることの弊害が TAT の日本における使用の少なさにつながっていると指摘している。TAT はロールシャッハ・テストのように個々の反応の個別的分析を総合して初めて意味づけが可能になるのではなくて、解釈時にわれわれは一つ一つの反応からそれぞれ個別に意味をくみ取ろうとする態度を自然にとる、としている。そのような意味で自身の反応解釈の方法を「直観法」と分類し、TAT を解釈するためには一種の「直観法」を洗練しなければならないと述べている。

しかし、鈴木は TAT における量的分析を全く否定しているわけではなく、各カードごとにそのカードにふさわしい反応の分類枠で分類すべきだとしている。いわゆるそのカードでありふれたポピュラーな反応と、その被検者に特異な反応とがあり、被検者の特性を引き出すためには後者に注目しなければならないという考えをとっている。そのためには何がポピュラーで何が特異な反応なのかを示すために、膨大な資料を提供している。彼は自分で調査した資料を基に、独自の分類枠と各カードごとの反応カテゴリーの出現頻度を各母集団（中学生・大学生・中年の男女、神経症・精神病の男女とシンナー・アルコール依存者の男性）ごとに提示して基準としている。ただしこのカテゴリー化は、あくまでも質的差異を考慮して各カードごとにおこなうだけであって、カード間をクロスすることは意図されていない、つまり量的分析を意図しているのではないと明言している。

施行法としては、上述の山本（1992）と同じくカードの枚数は 20 枚を選ぶが、Murray が定めたシリーズに若干の変更を加えてあるだけでカードの性差は尊重している。また、20 枚の流れが重要であるとして Murray のように 2 セッションでおこなうのではなく、1 回のセッションですべてを施行する重要性を説いている。さらに、教示についても被検者は自然に心に浮かんでくるストーリーしか語れないから、Murray のように「想像力の検査」とも、「できるだけドラマティックな話を」とも、安香（1990）の「なるべくおもしろい話に」ともいわない点が特色であると述べている。

鈴木（2002）は、マレーの欲求－圧力分析をはじめ、いくつかのものが提唱されてきたが、広く定着したものはないとし、その理由はそのような手間のかかる方法に頼らなくても直接的に反応から被検者のパーソナリティを推測することができるからであるとしている。そして、「TAT には記号化やそれに類する反応の諸要素のカテゴリー化はなじまない事実を積極的に確認することがまず必要で、その上で、分析・解

釈の方法を見いだすべきだと考え、実際にそうしてきた」（鈴木、1997, 2000）とする。記号化がなじまない理由として、各図版個々の特殊性と被検者の特殊性をあげたうえで、その要求に従うと記号はどんどん特化されるが、特化され過ぎるとそのために他の対象には当てはめにくくなるから、記号化自体の意味もなくなるから、と説明している。またこのように明確な分析・解釈体系をもたないということは、その都度自らのデータから被検者のパーソナリティを思い描いていかなければならず、これは自動的に解釈が得られるシステム化された手法と比べれば手間はかかるが、まさにこの点にこそ心理療法との接点があるとし、心理療法と本テストとの関連付けを試みている。

Ⅲ　TAT 分析法・解釈法の比較検討

以上をまとめると、TAT の分析・解釈法には大きく二つあるといえる。まず、坪内(1997)や安香・藤田（1997）らの、ロールシャッハ・テストの分析・解釈体系を強く意識した、記号化や標準反応などをもとめて数量化の道を開こうとする立場と、それに対して山本（1992）や鈴木（1997）のように数量化は TAT にはそぐわないとして、あえて個別理解の方法をとろうとするものの二つである。後者の立場では二人とも「直感」による解釈を勧めているが、これは両者とも安易な「直感」や検査者の思いこみや深読みのしすぎを戒めつつ、深い人間的な洞察と TAT に対する深い理解によって謙虚に解釈をするべきであるという点で一致しており、かつ両者ともに治療の領域への関係付けを試みているところが興味深い。

ところで、氏原（2005）は、量的解釈の進んでいるロールシャッハ・テストの解釈の要点として、上記と似たようなことを主張しているので、彼の考えを紹介する。まず氏原は反応の中に普遍的なものを見ることであるとする。しかし、それは被検者の個々の状況に応じて多分に個別的なものと絡み合っているが、その絡み具合を見ることでその反応の特徴、ひいては被検者のパーソナリティが描き出されるとしている。すなわち、普遍的な背景に個別的なものを浮かびあがらせなければならないとする。そして Klopfer（1954）の Fc の定義において理論的一貫性に欠けていることを彼自身が認めていたことを例としてあげ、Fc という普遍的カテゴリーの枠内になおいっそう個別的なものを認めてはいたが、そのために新しいカテゴリーを付け加えることはなく、解釈の仕方を通してその個別性を説明しようとしていたのではないか、との解釈を述べている。その上で、ロールシャッハ・テストにおいての数量化の意義は認めつつ、行き過ぎた数量化は反応独自の意味を損なうことにもなり検査者の主観的直感的全人的背景が不可欠としている。

氏原（2005）はまた、独特の細かい記号整理法をもつ阪大法の辻（1997）のことばを紹介している。すなわち、ロールシャッハデータの統計処理の結果がまちまちで妥当性も信頼性も認めない、科学的でないという批判に対し、辻はサンプルが違えば当然食い違いもでるが、ロールシャッハデータの場合は全体として一つの傾向が読み取れれば十分である、と説明しているという。氏原は「それは個の中に普遍性を探る試みであり、普遍的法則の網に個人を絡め取ろうとするのとは逆に、個人の中に潜む傾向法則を探り、それが個々人の状況を通してどのように発現しているか、を見いだそうとする」として統計的手法による蓋然性だけによらない、ある種必然的な主観的読み証しである、と結論づけている。そのうえで、辻の考え方をエビデンス・ベイスドに対するナラティヴ・ベイスド・アプローチを先取りした方法と集約しているが、この考え方は上述した山本（1992）・鈴木（1997）両氏の TAT の分析・解釈的態度に対する直観的態度にまさに当てはまるといえるかもしれない。付け加えると、実際に氏原（2005）の主張する TAT 分析・解釈法そのものも両氏に近く大変興味深い。また上述した研

究者の手法はすべて日本独自のものであるが、これは TAT 作成者である Murray（1967）自身の、人格というものは「質問紙と因子分析から引き出された空疎な抽象的な結果では、ほんの漠然としか明らかにされない。むしろ、個人の生活史の中で見られる決定的でかつ典型的なエピソードの、詳細で具体的な端々において実質的にあらわになるものであることを信じている」という趣旨にまさに合致した内容になっているように思われる。

まとめると、TAT は発表以来多くの分析・解釈法が考え出されてきたがいまだ体系化されたものはない。施行方法、たとえばどのカードを使用するのか、あるいは施行枚数などでさえ研究者によって異なる。これは多くの研究者により指摘されているように、TAT の各図版に付与された場面設定がそれぞれ人為的であり、使用された画材も一人の人によって描かれたものから切り張りされたものまであること、しかも前半の 10 枚のシリーズと後半の 10 枚のシリーズとでは具体性・現実性においてかなりの相違があるなどのカード特性からきていると思われる。ロールシャッハ・テストのように、まがりなりにも「偶然できたインクのしみ」という共通性もない図版に、統一された分類法を当てはめて数量化するということは、山本や鈴木らの指摘のようにかなり難しいものといえよう。彼らの主張するように、個々の物語られたものから被検者の生き方に迫っていく方法が、もっともわかりやすいのではないかと考える。ロールシャッハ・テストでさえ、先に示した氏原の見解のように、数量化の背景にある反応の意味をとらえようとする流れは続いており、その意味では TAT で物語られるものが被検者自らの生き方のある一面であると考え、全体として把握しようとする試みは理解されやすいだろう。おりしも科学性を求めすぎた結果として生じてきたナラティヴ・ベイスド・アプローチの流れは、極論かもしれないが TAT に追い風になるのではないだろうか。

ところで上述した多くの TAT 解説書は過去のものを新たにまとめなおしたものが多い。坪内の 1984 年に出版された『TAT アナリシス』は 1997 年に復刻されている。また、この坪内の著書に刺激を受けたことも一つの理由となって書かれた山本の『TAT かかわり分析』（1992）の最初のものは、1964 年に書かれている。ところで、TAT の解説書ではないが、氏家の『ロールシャッハ・テストと TAT の解釈読本』（2005）は 1986 年に出された『心理診断－ロールシャッハ・テストと TAT の臨床的解釈』を発展させたものである。さらに臨床心理学関連の専門誌でも TAT に関する論文などは以前より増えてきた感があり、今まであまり用いられなかった TAT が再評価されつつあるという印象が強い。しかし、その一方で、今まで述べてきた Murray による Harvard 版 TAT 図版は、日本での図版販売が中止されている。このように TAT を取り巻く環境にはまだまだ険しいものがあるが、今まで本検査に関して世界中に多くの論文の蓄積があり、臨床上有用であることは多くの研究者が認めている。時代の流れからみても、これからも発展させていかなければならないテストの一つであると考える。

Ⅳ　ま と め

日本で導入当時は盛んに研究されていた TAT が最近ではあまり用いられなくなっている。その理由として、一般的に記録や分析・解釈などに非常に手間と時間がかかり煩雑であること、投映法の検査としてロールシャッハ・テストにくらべて体系化された分析・解釈方法がいまだにないこと、また、数量化が難しいこと、得られる反応の意味などの基本的なテストの性格も明瞭とはいえないこと、などがあげられる。日本における TAT の分析・解釈法として大きく分けると二つある。一つは、ロールシャッハ・テストのように標準化を目指し数量化の道をある程度開こうとするものであり、また一つは、あくまでもロールシャッハ・テストと

は性格が違うものであるから、数量化するのではなく TAT 物語全体から被検者の生き方やパーソナリティに迫ろうとするものである。TAT は被検者のパーソナリティを知るうえで、多くの情報を与えてくれることは間違いない。物語をそのまま理解しようとする後者の立場は、世界的なナラティヴ・ベイスド・アプローチの流れにある意味で沿えるものと思われるので、さらなる発展を期待したい。

文　献

安香　宏（1990）：TAT　異常心理学講座　第 8 巻　みすず書房　pp. 120–169.

安香　宏、藤田宗和編（1997）：臨床事例から学ぶ TAT 解釈の実際　新曜社

安香　宏、坪内順子（1968）a：TAT の分析法と解釈基準の検討　臨床心理学研究、7(1)、1～14.

安香　宏、坪内順子（1968）b：精神分裂病患者の TAT 反応に見られる記述反応の特徴　臨床心理学の進歩　東京　誠心書房

安香　宏（1975）：TAT　岡堂哲夫（編著）心理検査学－心理アセスメントの基礎－　垣内出版　pp. 135–164.

Bellak, L.（1954）：The Thematic Apperception Test and the Children's Apperception Test in clinical use. New York : Grun & Stratton.

Klopfer, B. et al.（1954）：Developments in the Rorschach technique. Vol. 1. Harcourt & Brace World

Murstein, B. I.（1963）：Theory and Research in Projective Techniques John Wiley & Sons

Morgan, C. D. & Murray, H. A.（1935）：A method of investigating fantasies. *Archives of Neurology and Psychiatry*, 34, 289–306.

Murray, H. A.（1943）：Thematic Apperception Test Manual. President and Fellows of Harvard College

Murray, H. A.（1967）：The case of Murr. In Boring, E. G. & Lindzey, G.（Eds.）A history of psychology in autobiography. New York : Appleton-Century-Crofts. Vol. Ⅴ, pp. 285–310.

Murstein, B. I.（1963）：Theory and Research in Projective Techniques.（emphasizing the TAT）New York : John Wiley & Sons

Rapaport, D.（1946）：Diagnostic psychological testing. Vol. Ⅱ the Year Book Publishers

鈴木睦夫（1997）：TAT の世界－物語分析の実際－　誠信書房

鈴木睦夫（2000）：TAT パーソナリティ－二十六事例の分析と解釈の例示　誠信書房

鈴木睦夫（2002）：臨床ゼミ－心理検査 Vol. Ⅳ–1 TAT の基本　臨床心理学　2(4), 547–554.

Tomkins, S. S.（1947）：The Thematic Apperception Test Grune & Stratton, pp. 21–108

坪内順子（1997）：TAT アナリシス　垣内出版

辻　　悟（1997）：ロールシャッハ検査法－形式・構造解析に基づく解釈の理論と実際　金子書房

氏原　寛（2005）：ロールシャッハ・テストと TAT の解釈本

Watkins, C. E., Campbell, V. L., Nieberding, R. & Hallmark, R.（1995）：Contemporary practice of psychological assessment by clinical psychologists. Professional Psychology : *Research and Practice*, 26(1), 54–60.

山本和郎（1966）：TAT－かかわり分析　異常心理学講座第 2 巻　心理テスト　みすず書房

山本和郎（1992）：TAT かかわり分析－豊かな人間理解の方法－　東京大学出版会